様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１５１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０７８９

研究課題名（和文）護られ/創造された日本の伝統的身体文化研究

研究課題名（英文）Study of Protected / Created Japanese Traditional Body Culture

研究代表者
瀬戸　邦弘（SETO, KUNIHIRO）

鳥取大学・大学教育支援機構・准教授

研究者番号：４０４３４３４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では①年中行事など前近代から護られてきた「伝統的身体」、および②近代学校空間で創られた「近代的身体」に注目し、近代化という大きな「文化の波間」を経て日本人像とその身体観が如何に形成されてきたかを考察した。対象として①に関しては岡山市西大寺観音院の会陽習俗など前近代的要素（裸や争奪）を多く含む事例を、また②に関しては伝統校と呼ばれる大学や高校の運動部・応援団の育んだ文化性（バンカラ文化など）に注目し研究を進めた。研究成果としては時代が移り行く中で、たとえば文化財や学校文化などのように新たな意味を付与されながら「護られ/否定され/創られ」てきた日本人像とその身体観の一端が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we take note of 1) “traditional body” such as annual events that protected from pre-modern times and 2) “modern body” that created at modern school space and so forth. We aim to think about how the image of Japanese and their view of body had been created through modernization as a big “cultural wave”. As research objects, we choose 1) case like “Eyou” custom at Seidaiji Kan-non-in in Okayama prefecture that contains elements of pre-modern such as naked and struggle and 2) culture such as “Bankara culture” glowed in sports team and cheer team at universities and high schools called traditional schools. As research results, we clarified one end of how the image of Japanese and their view of body had been “protected / denied / created” while being given new means such as cultural property and school culture through changing times.

研究分野：スポーツ文化人類学

キーワード：スポーツ人類学　スポーツ・身体文化　エスニック・スポーツ　身体論　はだか祭　応援団文化　バンカラ文化　無形文化財

１．研究開始当初の背景

本研究では、年中行事で行われる伝統的コンペティション、および近代学校空間における身体を通して「護られ/創られた日本人の身体観」を考察する事をその目的とした。そもそも年中行事は前近代的価値が保持される空間でありいわゆる“伝統文化”として構成諸要素が継承されている。ところがその一方で「裸祭」や「民俗綱引き」などに含まれる“裸体”や“喧嘩・争い”などは現代的価値と相克するものとして注目、扱われその結果行事自体に大きな変容が求められる場合も出てきている。本研究ではこれら価値の相克に注目し、「伝統的な身体」と、それへの眼差しを抽出することになった。また、あわせて明治期以降の学校空間における身体に注目し、特に体育会運動部や応援団を通して獲得されていった身体に注目した。現在、応援団とは伝統的価値やその規範を堅守する傾向が強く、社会において良い意味でも悪い意味でも注目されるが、本研究では彼らが如何なる「伝統」を重んじ、如何なる「身体」を継承してきたかについて注目し、前時代の身体観の一端を抽出することがその中心的な関心事となる。これら二つの研究対象より身体を抽出することにより、明治期以降日本人が取捨選択し、その後、織りなされてきた日本人の「身体の記憶」を詳らかにし、体育・スポーツ科学分野に提供することがその研究背景となる。

２．研究の目的

本研究は、年中行事などいわゆる「伝統」的な文脈における身体、および近代以降「学校・体育文化」を通して否定され/受け継がれ/創られてきた日本人の伝統的な身体観を対象とし、その継承や変容過程を検証し、「日本人」の身体観を考察する事を目的とする。

そもそも年中行事とは前近代の価値観が保持される空間であり、そこで継承される諸要素はいわゆる伝統的文化として位置付けられる。本研究では特に「裸祭（岡山県会陽習俗等）」や、「民俗綱引き習俗（沖縄県等）」など「裸や暴力（喧嘩・争い）」とも表現され「陋習」とも時に揶揄される前近代的な要素を含む年中行事に注目し、参与観察を通してそこに受け継がれる「身体の機能と役割、そして期待とその眼差し」を紐解くことになる。またあわせて明治期以降、近代国家建築の途次に、学校という空間において日本人の身体を育み、矯正してきた体育・運動部文化にも注目し、近代化以降日本人の身体が西洋と前近代の価値の狭間で如何に混淆され、現在我々が「日本的」と評する身体観が形成・位置づけられていったのかを理解することも大きな目的となった。その際に、特に本研究では運動部や応援団という存在に注目し研究を展開した。たとえば、学校における応援団とは明治期に登場して以来、先人から受け継がれる価値を堅守する傾向が強く、その変化・変容は非常に緩やかなものと言えよう。彼らはいまだに“バンカラ文化”と呼ばれる明治期に日本社会で誕生した和様折衷文化の色彩を色濃く遺しながら独自の身体文化を継承している。したがって彼らは学校空間で育まれ受け継がれる「身体」を抽出するのみならず、当時の日本文化を抽出するには非常に適した対象となるのである。

2-1.伝統的コンペティション研究

年中行事では、日常生活の中ですでに失われた近代以前の感じ方や考え方が、ひとつの地域文化として継承されている事になるが、本研究では岡山県岡山市西大寺観音院他で行われる「裸祭」、沖縄県で継承される「民俗綱引き」を取り上げて研究を進めた。たとえば「裸祭」とは参加者が裸体（締め込み姿）となり身体を清める事により清浄無垢さを手に入れ神仏との交渉が叶うという往時は全国的に広く見られた行事であった。現在では限られた事例のみ存続されるに留まるが、それらはそれ故に前近代的価値観を考察する場としては非常に重要なものとなる。西大寺観音院では寶木（しんぎ）という事物に籠められた「福」を求めて、人々は激しい争奪戦を繰り広げるところとなるが、それが行われる空間（フィールド）、決まり事（ルール）などが参加者たちに暗黙裡に共有されながら争奪戦が継承されており、その点、スポーツ史やスポーツ文化研究の立場からはスポーツのひとつの“原初形態”を考察する場としても興味深いところである。ところで、これらの行事は古来より一様な姿を保持しながら受け継がれてきたわけではない。たとえば、西大寺会陽では門前町の社会構造の変化に応じて、寶木争奪戦を含む祭りそのものにゆるやかな変容が認められる。また「裸」そのものも観光コンテンツとして、またメディアの取材対象として注目されるようにもなってきている。ところで、これらは、一方で現代の価値規範を「逸脱」した存在としてもクローズアップされる事になり、「価値の相克」を経験し、結果として行事自体が現代的変容を迫られることにもなっている。日本文化の継承過程から観れば「興味深い」対象も、現行法や現代的道徳的価値に照らし合わせれば「逸脱者」として是正されるべき存在ともなるのである。

2-2. 応援団研究

次に、応援団への研究視座とその必要性に関して説明する。応援団といえば先人から受け継がれる価値を墨守する傾向が強く、そのために学校の内外から注目されることが多

いのは周知の事実であろう。一方で、この状況は言い換えれば、現代的価値や規範とは異なる“前時代的空気”がこの組織に充満していることを意味し、その時代の日本人像を抽出するには適した対象となるのである。本研究では全国各地のいわゆる“伝統校”と呼ばれる高等学校で継承・実践される応援団活動に注目し、明治期から昭和にかけて形成されたいわゆる“バンカラ文化”としての応援団文化について考察がなされることになった。またそれらの研究と同時に日本の応援団文化の中心である東京六大学応援団連盟の研究調査を実施している。明治期に早慶をはじめとする大学応援団が組織され、技術も徐々に洗練されていくことになる。東京六大学応援団では技法のことを「テク」と呼ぶが各校独自のテクが生み出され、スタジアムの応援席でも独自の文化が花開くことになったのである。報告者はすでに東京六大学を中心とする応援団研究の緒に就いておりその成果は「大学応援団という空間とその身体」『近代日本の身体表象 演じる身体・競う身体』（森話社 2013）において発表しており、この知見を基に周辺地域に残る伝統校の実践をも含め「明治期の文化残滓」を抽出しそのエッセンスが現在の応援団文化にどれほど継承されているのかを地域間文化伝播などの視点からも検証している。

３．研究の方法

本研究ではこれら上記目標を達成するために伝統行事の関係者、応援団組織における多くの参与観察を行い、彼らが共有する独特の身体世界を、調査によって得られる言説ならびに画像、映像の分析から明らかにしている。あわせてそれらが地域や集団のコミュニティの紐帯としてどのような文化・社会的役割を果たしているかを理解する事も重要な考察点となっている。そのために、本研究では実践者に共有・継承される暗黙裡の身体・身体技法の情報を収集し、地域・集団文化としての身体を抽出しその認識のあり方を言語化する事を目指している。あわせて、先行研究を加味しながらその背景に共有される「日本文化」としての古来より共有されてきた「身体」を抽出することを試みている。

ところで、伝統スポーツ文化においてはルールなどの約束事が明文化されていない場合がほとんどである。そのために本研究においては実践者たちに共有される「約束事やハビトゥス（社会的に習慣化された身体技法）」を理解するために、(1)エティック（研究者の視点）、(2)イーミック（実践者の視点）の両面から捉えスポーツ・身体文化の可視化が叶うように心懸けられている。たとえば、会陽のような伝統的コンペティションの参加者は地域に伝承される信仰対象と自身を繋げる独自の身体観を保持しているが、この宗教的コンテクストに位置づく身体理解は、まさに文化コードのひとつであり、またそれは平素は見えない人々の認識の深層を可視化する機会にもなる。この「暗黙知」として共有される「身体」を研究・実践の両面から理解・考察するために報告者は年中行事へ積極的に参加している。

3 年間に渡る研究では、基本的に現地において年中行事・および応援団活動の参与観察（聞き取り調査、映像・画像）を行い、収集したデータのアーカイブ化を最重要課題のひとつと位置づけ、それらデータの分析、考察を展開している。１年目は前近代的な身体の収集を中心的に行い、２年目には近代以降の身体の収集を、完成年度にはそれらの研究の継続と補足調査、および総合的なまとめを実施している。また参与観察に際しては各地域の新聞等のメディア報道資料の収集にも力を傾注し、地域のまなざしともいうべき資料の蓄積の収集、検討も重要な課題としている。また学術的先行研究の検討にも大いに力を注ぎ学術雑誌、および単行本として刊行されている論考の収集、検討を行い「文化の動態」として伝統的なスポーツ・身体文化の分析を注意深く進めた。

４．研究成果

本研究では、年中行事で行われる伝統的コンペティション、および近代学校空間における身体を通して、「護られ/創られた日本人の身体観を考察する事」をその目的としたが、年中行事の研究では「伝統的な身体への眼差し」の抽出が、また運動部・応援団の研究では近代化を経て獲得されていった「学校空間における身体」の重要なエッセンスの抽出が叶った。そしてこれら二つの研究対象を基に抽出された「日本人の身体観」をベースに明治期以降日本人が取捨選択してきた日本の「身体の記憶」の一端が詳らかになっており、その成果はすでに国内外の学会発表や論文、著作においては一部発表され、体育・スポーツ科学分野に提供されている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）

１．瀬戸邦弘、「創られる伝統的スポーツの世界　異在郷（ヘテロトピア）としての出雲駅伝 」（単著）『山陰体育学研究』 34 巻１号 pp.1-9 査読有 山陰体育学会 2017 年 4 月

２．瀬戸邦弘、「文化としてのスポーツ・ツーリズム」（共著）瀬戸邦弘 橋本和也 田里

千代 相原進『スポーツ人類学研究』第 18 号 pp.31-54 査読無 日本スポーツ人類学会 2017 年 3 月

３．瀬戸邦弘、「“共通語的土地ことば“として伝統を繋ぐ民族スポーツ 」（単著）『スポーツ言語学研究』１巻１号 査読有 日本スポーツ人類学会 2016 年 12 月

４．瀬戸邦弘、「神に護られる体育・スポーツ空間: イエズス会の教育的理想と上智大学における体育・スポーツ実践」（単著）『上智体育』49 巻 pp.１-13 上智大学体育学会 査読有 2016 年 2 月

〔学会発表〕（計　５件）

１．瀬戸邦弘、「日本文化としての応援団」香港中文大学日本研究科【Compatrative Asian Research Network】 開催地：香港中文大学（中華人民共和国香港特別行政区） 2017 年 3 月 8 日

２．瀬戸邦弘、「大学応援団という空間とその身体」 シンポジウム「応援団の歴史と現在」研究発表・シンポジスト 旧制高等学校記念館夏季セミナー 開催地：旧制高等学校記念館（長野県松本市） 2016 年 8 月 27 日

３．瀬戸邦弘、「ジャパノロジーとしての応援団研究　クールジャパンと応援団の現在」日本体育学会第 67 回大会 開催地：大阪体育大学（大阪府熊取町） 2016 年 8 月 25 日

４．瀬戸邦弘、シンポジウム「スポーツとツーリズム」シンポジウムコーディネーター・司会、パネリスト：橋本和也 田里千代 相原進 日本スポーツ人類学会第 17 回大会 開催地：立命館大学（京都府京都市） 2016 年 3 月 28 日

５．瀬戸邦弘、「体育会運動部に求められる儀礼性に関して－上智・南山大学対抗戦（上南戦）を事例として－」 日本体育学会第 66 回学会大会 開催地：国士舘大学（東京都世田谷区） 2015 年 8 月 27 日

〔図書〕（計　２件）
１．瀬戸邦弘、「駅伝・六大学野球・ラグビー対抗戦の儀礼性」pp.106-107、「応援団の文化：近代日本を創ったバンカラ文化」pp.108-109 「文化としての駅伝空間：バーチャルな伝統空間で創られるスポーツ文化」pp.134-135 「西大寺会陽の宝木争奪戦：日本の伝統的ボールゲーム」pp.170-171 「ハワイのマカヒキゲーム：ハワイアンアイデンティティーと伝統スポーツ文化」pp.178-179 「エジプトのナッブート：ナイルのほとりの民族スポーツ」pp.192-193 『よくわかるスポーツ人類学 』（共著） 瀬戸邦弘 寒川恒夫他 ミネルヴァ書房 総頁：224 2017 年 3 月

２．瀬戸邦弘、「体育会という日本文化を考える」pp.2-3 『月刊みんぱく（特集体育会系）』 国立民族学博物館 総頁：20 頁 2016 年 4 月

６．研究組織
(1)研究代表者
瀬戸　邦弘（SETO, Kunihiro）
鳥取大学・大学教育支援機構・准教授
研究者番号：40434344

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者　なし